山とスキー

第六十二號

札幌 山とスキーの會 發行

大正十二年七月廿七日第三種郵便物認可
大正十五年六月二十八日印刷納本
大正十五年七月一日發行（毎月一回一日發行）

◇本誌は創刊號より秩父宮殿下の御愛讀を得てをります◇

第六十二號目次

記事

Das Wandern im Gebirge　須藤宣之助　〔二〕
ニセイカウシユツペ山と石狩北見國境の山　佐々木政吉　〔九〕
石狩岳の登路について　岡村源太郎　〔一六〕
所謂標高差とレコードの關係
「スキーテクニツクの研究」欄を設くるに當つて　廣田生　〔二三〕
外國通信　麻生武治　〔二五〕
彙報抄錄　C. J. Lüther　〔二五〕
スキーテクニツクの研究　廣田戸七郎　〔1〕

寫眞版

トムラウシ岳より望める石狩岳　山縣浩
ニセイカウシユツペ山　須藤宣之助

大正十五年七月發行

浩　　山　　縣　　岳狩石るめ望り岳シウラムト

Motto:

Die erste Nachricht.

Die meisten menschen belächeln das, Wovon sie keine Ahnŭng haben!

Das Wandern im Gebirge ist nicht „Bergsport".

Der„ Alpinismus "for dert von allen freiwilligen Betätigungen den Menschen die meisten Opfer an Gesundheit und Leben.

Erstens durch die Gefahren, die den Bergen innenwohnen ŭnd Zweitens durch die An-Kenntniss und Anbeholfenheit der Menschen, besonders derer, die diese Eigenschaften durch Dreistigkeit Zu ersetzen Wahnen.

Aber auch das Grosstŭn mit alpinen Leistŭngen hat viel Anheil angerichtet ŭnd hat die unerfahrene, den richtigen Ehrgeiz noch ruht einschätzende Jŭgend Verführt, sich auf dieselben Abwege Zu Stürzen.

Leider so oft im vollsten Sinne.

Das Wandern im Gebirge ist ein Labsal für Geist und Körper!

Das begreifen nicht die „Spiesser" und das verachten die - „Fexe"!

Dem Wanderer, der frei von Prahlsucht ist, sind die folgenden Ratschläge gewidmet.

Mathias Zdarsky.

ニセイカウシュツペ山と石狩北見國境の山

須藤宣之助

一行　野崎健之助　井田清　渡邊干尚

登山の歴史の新しい北海道でまだ登られてない比較的高い山々の中にニセイカウシュツペ山がある。そうしてそれは中央高地の東北にある一雄峯である。大雪山から石狩川の深い谷を距てゝ眺められるその前尾根の鋭い線は實にすばらしい。去年の三月數日間吹雪かれたあとの快晴の日に黒岳小屋から見たときに、その輝しい白銀の雪稜の魅力に憑かれたのであつた。

登つた記錄としては五六年前に、小泉氏が夏にニセイケシュオマツプ川を溯つて前尾根の一三〇〇米位の地點にゆかれたといふのが山岳に載つてゐる。

五月十六日

トムラウシ岳にゆく山口君等の一行、偶然僕等と途中まで行を共にする松川氏一行と例の十二時卅分の下り列車に乘る旭川で山口君等と別れ、八時頃上川につく。菊谷さんがいつもの通り雜貨店まで來てゐてくれる。かつぎなれぬリュク

サックの重さに四里の道を疲れて三時頃層雲別村の菊谷さんの家につく。ニセイカウシュペの頂上はいつも雪がかゝつてゐて見えないが、前尾根の岩がうす黒く見える。とても大きいらしい。地圖の一五一三米の曲つた所までは尾根もそんなに急でもないらしい。又針葉樹もそのあたりまで生えてゐる。で風のあまり強くあたらない限りその尾根の上で天幕を張ることが出來ると思つた。菊谷さんにもう一人人夫を頼み早くねる。

五月十七日

地圖の上での豫定では、ニセイケシエオマップの右の尾根に出て前尾根の一三四〇米の所に出る積りだつた。が前日松川君がその澤と双雪別川との間の澤が登り易いといふことを調べて來てくれたのでその澤を傳ふことにした。

うす寒い五時四〇分頃露の下りた小路の草を踏んでそこから數町行つて澤の口に出る。それからしばらく澤に沿うて耕された開墾地を通つてゆく。その狹つた所あたりから斑らに雪が殘つて居り、卅分も歩かない中に全部雪の領域に移つてゆく。適當な所で澤に分れ右の尾根に出る。そうしてガレた個所を右に迂廻してゆく。この附近は立派なトド松の森林で朝の明るい光が漏れて來て葉の裏が青々と透きとほる樣に見える。一一〇七米の所に來た時には九時すぎてしまつた。始めの考へでは前尾根に九時について頂上を越えてキャンプする積りだつた。併し荷が重いので思ふ樣にはかどらない。こゝで一時間餘りすごし、少し下つて卅分で前尾根に出た。傾斜のゆるい廣い尾根で雪が軟くなつてゐるのでスキーをつける。樹の開けた所に出ると大雪連山の全容が見える。黒岳の赤黒い崖、凌雲の北に出た鋸齒狀の雪稜或は北鎭岳の圓いドーム、比布岳の長い雲庇、それが美しいコンビネーションをなして偉大な山容を遺憾なくあらはしてゐる。それから間もなく一三二〇米の等高線に來た時は一時近つた。そしてこの前尾根を傳つて迂廻した距離をとつて頂上に行き、それから露營地を見出すには時間の餘裕がなかつた。キャンプの位置を谷にしやうかと思つたが又明日登つて來なければならないのでこの尾根に張ることにした。僕等は針葉樹の横に天幕をはり、松川君は大きな枝の垂れた中に雪を掘り下げて、シュラフザックで寢ることにした。四時頃コースを見に一五一三米の所まで行つた。岩壁は前後の二つとも想像以上に大きい

3

すばらしもので殊に後のは西南部がひごくえぐられてゐる。そしてそのへりを通ればゆかれないこともないらしい。もしそれが不可能でもそこを谷に下りてしまつて眞直ぐに頂上の三角櫓を目がけて上れば樂に行かれるし、時間的にも二時間位は早いらしい。

とにかく明日の天氣を見てその二つの路を選ぶことにした。

やゝ光が薄らいで峯がうす黑くなつて來た頃歸り出した。はるか下の木の中に煙が上つてゐる。その煙が早くおりて來いと呼んでゐかの樣に、四人はぶん〳〵飛ばしてすぐ天幕の所に歸つて來る。焚火が大きいので七八尺位雪が掘れて土が出てしまつた。狹い火の圍りで、煖まりながら歌を歌つてゐると、シュラーフザックの方からも歌が流れてくる。

五月十八日　終日降雪

昨夜天幕にもぐりこんだ頃には明日の好晴を豫想した程少しも怪しそうな雲行でもなかつたのに、今朝は一面に雪がふつてゐて、重い雪片がバタ〳〵天幕にあたる。八時頃までに止みそうだつたら出かけやうと又もぐり込んだが、その時刻にも盛にふつてゐる。この五月に、まして昨夜の樣な星空にこんなに烈しい吹雪をどうして想像出來やう。隣の松川君たちも靜かにシュラフザックの中にもぐつてゐるらしい。滯在ときめこむと又ねむくなる。人夫の大きな木をひいてる鈍重な響が聞える。

十一時すぎ、とにかく頂上まで行つて見やうといふので降雪中を輕い身仕度で出かける。岩の所にすぐ來てその下の急斜面をボーゲンで谷に下つた。この兩側の立つた僅か五六間の谷は春の餘光をいつ受けるのか。この春の日にも猶冬の樣な荒い雪粒にたゝかれてゐる。岩角で風をさけながら食をとり、それから十五分位谷を上つた。もうこの上あたりが頂上らしいのでこの點をスキーデポットとした。これからは僅か三百餘米の高さである。新雪が尙深い爲シュタイグアイゼンをつけずにジッグザックに登つてゆく。卅分ばかりでもう頂上に出たなと思つたら吹雪の中に三角櫓が見えた。頂上は廣いらしいがこの吹雪には凍りついた三角櫓の周圍が八人の腰を下し得る狹い場所だ。併しその吹雪よりも猶烈しい興奮うれ

しさにしばらく浸ひ得たことだらう。

特にいふやうだがこの狹い高地に四圍の有樣と、吹雪に距てられてゐると殊に强く互の融合された感情の暖さがありのまゝに寫つて來るやうだ。寒さの爲長く居ることも出來ないので、唯水筒の紅茶を飲み合つたまゝ元の斜面を下りかけた。谷に下りて又スキーをつけ滑らかな雪の上を自由にスラロームをかいて露營地近くまで谷を滑り下つた。そして尾根まで上つて天幕につく。四時頃松川君等は大雪山に登るべく下つて行き、針葉樹にその四人の姿がすでに消えてゆく。幾分か寂しい氣持が後に殘つたのですぐに焚火にあたりに行つた。

五月十九日

寒くてねられぬまゝに菊谷さんと交代にNと焚火の傍に横になる。穴が深くなり煙の拔けが思い。曇つた空に不安そうな眼をあけてゐるとやがて東の一隅に星を一ッ見つけた。併しそれもやがて流れ早い雲に見失つた。

朝になるにつれてこの雲も高い所から追ひやられて七時頃には再び更に美しい姿が見えた。峯、岩壁、はひ松すべては白銀の裝ひに陽をうけて新しい趣である。鞍部迄續いた谷は二つ曲つてはひ上つてゐる。そして又新しい沈默に靜かな氣分を漂はしてゐる。

天幕を乾すのに時間をとられたので出發は後れた。人夫一人は昨日返したので菊谷さんと我々四人。今日は廣い頂に立つて思ふ存分擴くなりたい。一五一三米に着いた時から又あやしい空になつて、來てガスがかゝつて來て朝の輝しさが刻々もぎとられて來る。遂に岩の稜を傳ふことを斷念しなければならなかつた。で又岩の下から谷に下りてしまつた。荷が相當重いので無理なコースもとれない。谷に沿ふて頂上右下の鞍部に出ることにした。時々うすれるガスの間にえぐられた岩壁とそれから南に走る脊稜が東側は雪庇をなして立つてゐる。その幅狹い稜に心ひかれつゝ高さを增して深い雪に淺くなつた谷を樂に登りつめて十一時十分鞍部についた。依然ガスの往來が烈しくてすぐ傍の圓頂さへ見えない。幸なことにガスが霽れる間にこれからゆくべき尾根が見えた。二個所尾根をさへぎつて岩のごつ〳〵した所が見える。ガスの爲か

それが實に偉大に立つてゐる。又一難關にあはなければならぬ。所々岩の間に續いてる雪面を見たのでそれを登らうと決心した。鞍部の草地に腰を下して五人はふるえながら飯盒の堅い飯を食つた。無理につめこむにも餘りの寒さだ。

尾根はこゝから東に折れて又直角に石狩、北見の國境の尾根に交つてゐる。シユタイグアイゼンにはきかへて緊張してそこから六〇米高い圓頂に登り、こゝで眞直に東に派した斜面を下る。この東斜面は足がもぐる程雪が深い。間もなくその最低部についた。もう岩は目の前にある。Iを先にしてアンザイレンをする。その間に又ガスは濃くなつて來て空模樣は益々惡化するのみで一向霽れない。待つて居てもはれる見込みのつかないのにその岩を通過するのは危險なので又この岩稜を斷念してしまつた。そしてその北斜面を下りることにした、その上部は四〇度以上の急傾斜だ。注意深く下りかけたがこゝも亦案外深雪で氣拔けした樣に下りてゆく。だが堅かつたら可成困難したかも知れない。この斜面はこの尾根と國境尾根との交點とニセカウシユツペの北に派出した尾根に圍れた廣い範圍のY字形のカール(?)である。

再びスキーにはきかへてチカリ別川に下りて行つた。見返へればガスに包まれて北斜面だけが無限大に見えるばかりである。澤の窪みに休んで食事を攝る。側の木から可愛い木鼠が下りて來てブールの上で遊んでゐる。相當緊張した心にはこの可愛らしい木鼠の慰みが一寸した輕い氣分を起させる。

國境線△一七九五米より少し北部からチカリ別川に出る廣い尾根がある。出かける時には遂に雪か交つて落ちて來る。一時間足らずで國境線に出る。はひ松を除けて東側に出て、支湧別川の二股の支流の上に適當な露營地を見付けたのは三時廿分だつた。

もう大分標高が下つてゐるので白樺も大きい。太い枯木も豊富で忽ち大きな火が出來る。飯を食つてゐるときにまだ大粒の雹がいたい程あたる。併し間もなく風も雲もおさまつてその後に來る靜かな夕闇が訪れて來た。焚火が景氣よく燃えバイブの煙が傍から立つてゆく。それは全く疲れた體にしみ渡つた甘い藥だ。

今日は實にアルバイトの一日だつた。明日はいい天氣らしい。

五月廿日

何時間かの熟睡に起きた時は大分明るかつた。支湧別川の谷から盛に霧が昇つてゆく。皆の心はゆつたりした氣持で滿ちてゐた。熱いお茶がうまい。

八時、天幕の下に敷いたタンネンの葉とまだ燃えてる火を殘して立つた。天狗岳の上り迄はタンネンの並木路で右からその路の半ば位まで陰影がツヨクうつゝてゐる、いつか寫眞でみた樣な美しい黑と白とのコントラストをしてゐる。前山の天狗岳が近くに見える。おくれる菊谷さんを待つべく時々リュクサックを下して滑る。上りの中途からは顧つてみると浮き雲の空に駱駝の脊の樣なニセイカウシュツペの雪稜と穗高の涸澤岳の樣な岩が見える。九時廿分一六三四の三角點につく。こゝには立派な三角檜が立つてる。その上に立つて見るならば國境の尾根が殆んど全部見える。東には北見の山脈が連々と續いてゐる。多くの襞を出してる細い國境線の最奥に屋根形の大きな山が見える。地圖で調べるとそれは武利岳に違ひない。その他支湧別岳、屏風岳、遠くは石狩岳まで見え、西をむけば遠く天鹽岳の白い姿がかすんで見える。十分寫眞を取り、暖い頂に一時間餘もすごした。又そこから三百米許り滑つて下りてゆく。地圖が白瀧にはいつてからは急にだつつ廣い平坦な尾根になる。同じ樣な木と雪との單調な所だが今迄續いて來た氣分に歩足が誘れて少しも倦きずに北へ北へ歩いてゆく。尾根が曲つてをり、所々、小さい上下があり、かなり解りにくい。峠に近づくにつれて伸びる氣分が出て來て途中コッヘルでお茶を沸して休む。正面に谷を距てゝチトカニウシ山が見え、それを目あてに行く。雪が淺くなつて木の周りには笹が見え出した。そうして次第に低くなつてゆく。それと共に前のチトカニウシ山の裾が大きくなつてくる。一體どこに驛遞があるかと疑ぶむほどあたりは山に圍れてゐる。やつとその裾に達し小さい澤を下つて行つたとき小屋を見出した。婆さんが一人居て驚いた樣に迎へて呉れる。

その邊はまだ一面の雪の領域である。汽車の型をしたストーブにあたつて、横になる。夕霧の立つ中にスキーをはいて夢中に滑つてゐる菊谷さんが入口の硝子から見える。贅澤にも風呂なんかに這入つてさつぱりした氣分になる。夕食には菊谷さんの冷酒を飲むうれしそうな顏を見ながら兎の肉をつゝつく。

五月廿一日

霧深い朝六時北見峠を石狩國に下りてゆくべきこの山旅の最終の一日だ。朝の堅い雪上を可成のスピードで滑つてゆく。電線に沿うて谷を流れのまゝに曲り〳〵行く。峠より三里半程は雪の境である。雪が消え、殘りする樣になつてからスキーをぬぐ。軟かい土の觸感に足が輕々運れる。木々は目覺しく新綠して狹い谷あひも明るく感じられる。小鳥も啼き蝶も歩く先を飛ひ廻つてゐる。三四日壓しつぶされて來た心が急に愉快な輕いテンポで浮き立つ樣だ。せわしい時間のない歸路にやゝもすればゆつくりしたい氣持に誘はれて、橋に來ては腰かけ小澤に出ては休んで水を飲む。谷は茅刈別村に來て廣く開いて、開墾地が見え出す。チカリ別川の奥にニセイカウシュッペ山が我々に最後の法悦を與へて立つてゐる。道々兩側に生えてゐうす綠の蕗のとうが美しい。とう〳〵六里の道を歩いて上川町の前のチカリ別川にかゝつた橋に來たときにバッタリ石狩岳に行つた友と出合つた。互に成功を喜びつゝ手に手にピッケル、スキー、天幕を持ち驛につく。菊谷さんも旭川まで出て來られるので一緒に車中の人となつた。

附、　このつたない紀行文は只案内記として見て戴きたい。北海道の五月の輕い山旅として相當面白いコースだと思ふ。

ついでに參考地圖は

ヌタツクカウシュッペ山、上支湧別

白瀧　石狩留邊志部

× × × × × ×

ニセイカウシュツベ山　　須藤宣之助

石狩岳の登路について

佐々木政吉

夏の登路

多くの登路が考へられ又實行されて居るが大別して

石狩國側よりするもの

十勝國側よりするもの

二つとする事が出來る

前者は更に

(1)石狩川を溯るもの

(2)ヌタクカムウシュペを乘越へ石狩川に達するもの

(3)オプタテシケを縱走し石狩川に達するもの

とに分けるを得。

後者は

(4)十勝川を溯るもの

(5)音更川を溯るもの

とが考へられる。

(1)石狩川を溯るもの

(陸地測量部地圖石狩留邊志部、ヌタクカムウシュペ、旭岳、上支湧別、石狩岳、を參照せられたし)

上川驛(地圖石狩留邊志部中の下留邊志部にあり)に下車すれば樂な一日行程で双雲別温泉に達し得る。

翌日は温泉から川傳ひに大箱を經てホロカイシカリの本流にそゝぐ所あたりまで行ける。大箱近邊までは温泉から水にぬれずに濟む踏跡程度の道がある。箱は右岸の崖の上も歩けるそうだし、又箱の中もべら棒に雨でも降つて水の

多い時ででもなければ通る事が出來る。

第三日はホロカの合流點から前石狩澤（地圖でシビナイ川の向ひ側から本流にそゝぐ澤）の合流點頃まで歩ける。

こゝからは前石狩澤、石狩澤、大石狩澤の何れかを登つて頂上に達し得る。

前石狩澤より登る時は澤頭で一泊すれば翌朝頂上に達して降り初められるから都合よく行くだらふと思ふ。

石狩澤（ヌタプヤムペツの向側よりそゝぐ澤）を登るなら前の日前石狩澤の合流點からも少し頑張つて出來るだけ石狩澤に近く來て置けば、石狩澤を登つて頂上を極めどこかの降口まで降れるからそうすれば一日早く降り初め得るわけだ。併しこの澤は石狩岳から石狩側へ出た尾根の中途で終つてゐるから、澤を登りつめてから樫松を少し泳がねばならない。

大石狩澤（本流となるべく、クチャウンペツの出合ひから一時間半ばかりで二股に出る、この二股の南から來るものをペテトク、他を大石狩澤と云ふ）を取れば前石狩澤から大石狩澤の下の二股（一二〇〇米等高線の通れる二股）を左に行き、上の二股（一三六〇米の所）邊りまで達し得る、そして翌日二股を右に入つて行けば晝過ぎまでには頂上を踏む事が出來る。

この三つの澤の中で夏としては大石狩澤が最も興味あるものの樣に考へられる。又ペテトクを登つても行かれるし、ユーニ石狩澤を登つてユーニ石狩岳（地圖ではユーニ石狩岳と音更山の名稱が反對について居る）へ登つて石狩岳へ達するコースもあるが、後者は石狩岳からの降り道にとつた方がよさそうだ。

(2)ヌタクカムウシュペを乘越へ石狩川に達するもの

ヌタクを乘越へるには

双雲別温泉より

松山温泉より

松山温泉より化雲内を溯りて

の三者がある。

(a)双雲別温泉より

温泉から黑岳まで登山道路がある、温泉から一日で黑岳を經てシューマフレベツを渡り北海岳の尾根をからんで白雲岳へ行き白雲の平ケ岳側に降りて野營する事が出來る。足が遲かつたり、荷物が重かつたりした時には黑岳の小屋へ泊るか白雲への途中で野營するかすればよい。次の日は

平ケ岳を通つて忠別岳へ行きヌタプヤムペツを出來るだけ降つて置けば、三日目には石狩本流の岩魚が食へる。

(b)松山溫泉より

松山溫泉へは朝美瑛で汽車を降りて志比内を通つて行けば夕方につく。（この場合にに美瑛、當麻、志比内の他圖を必要とする）松山からは登山道路によつて旭岳へ行ける松山を朝早く出ると旭から熊ケ岳北海岳の尾根へ出て白雲に至り平ヶ岳側で泊り得る。

(c)化雲内溯りて

松山溫泉から少し澤歩きに馴れた人ならトムラウシから來る澤と化雲岳（△一九二四、五）から來る澤の二股まで一日で來れる。この二股からは右へ入つて途中から化雲岩（△一九五四、五）とトムラウシとの間の尾根から出る澤に入つてもよからうし、二股から左の澤を行つてもよい。左の澤には二股から少し上つた所に大分大きな瀧がある。この瀧は右の方をからめば登れる。

右の方にも瀧があるそうだが左の方より餘程少さいとの事である。

兎に角どつちかの澤から登つても化雲岩の方へ出る樣にすればよい。化雲岩からは忠別川の圈谷を廻つて一八八二の所からヌタプヤムペツの方へ降りて行く。

(3)オプタテシケを縱走し石狩岳に達するもの

（地圖石狩、旭、十勝川上流、十勝岳、下富良野）

先達硫黄入の泥が流れて大慘害を與へた十勝岳へ登つてオプタテシケをトムラウシまで縱走し化雲岩の方へ出るコースである。十勝岳へは上富良野から先日幸ひにも泥の被害を受けなかつた吹上溫泉（瀧の湯）へ四里位で、そこに一泊すれば、オプタシケを尾根傳ひに歩いて中二晩も尾根に泊れば樂にトムラウシを越して化雲の方へ出られる。この尾根は餘り根曲り笹や樅松に苦しめられずに歩けるらしい。自分が歩いたのでないからよく解らないが。

(4)十勝川を溯るもの

（地圖石狩、旭、ニペソツ山、十勝川上流、佐幌岳、新得、十勝岳、下富良野）

新得から十勝川を眞直ぐに登つて行つて、トムラウシ川を入つて更にヌプントムラウシを登り地圖に溫泉の印のある所から狩勝の國境線の尾根と十勝の河東、上川郡境界線の尾根との間に入つて居る澤へヌプンの本流から分れて郡

國界の交叉した峯へ登りつめるのと、富良野方面から十勝岳を乗越してシー十勝川の本流か十勝岳地圖の上川の字の上と川の間を流れてシー十勝に合する名無の澤を下つてトムラウシ川との合流點に達して前者と同樣のコースで石狩岳へ達するものとが考へられる。

何れにしても人家を離れてから石狩岳に達するまでを一週間と見て置かねばなるまい。

(5)音更川を溯るもの

(地圖石狩、ニペソツ、芽登温泉、芽登)

士幌から歩き出して音更川本流を溯り石狩岳の音更川本流が七七五の獨立標高の所で南北に分れる北の方を取り最初に左より入る澤をつきつめて尾根にとつついて石狩岳に達するもので士幌を出てから五日目か六日目には石狩岳につき得る。

以上で夏の登路を大体書いたがつけ加へて置きたい事は以上のコース中ペテトクを溯るもの及び十勝川を溯るものの中でヌプントムラウシ及び名無の澤で上と川の間を流れる澤は登山を目的として歩いた人のないもので私も山のテツペンから廣々とした流域の森林を望んだに過ぎないものであるからはたして通れるものか通れぬものか解らない、只それ位の日數で通れるだらうと想像するものである。

併し他のコースは慶應の山岳部、北大豫科旅行部の方々や私自身の歩いた記錄を土臺として書いたのだから大体正確な積りであるが尙間違ひがあつたら教へて頂きたい。

春の登路

春と云つてもこゝでは北海道として相當高い所で野營するのであるから燃料となる榧松の雪の上から首を出した頃即ち四月の終りから六月の初め頃までを云ふ。

この頃だと平地には雪がなくなり、丁度夏なら殆んと歩けない笹原の高さの所が未だ雪が殘つて居て、夏にいぢめられる笹を雪の下に踏みつけるし、高い所では風が強いため榧松などが顏を出す位に雪が消へて居るから、夏にはとれないコースがとれて割合に短かい時間で目的地へ達する事が出來るし山は積雪のため夏より寧ろ冬に近い感じを與へて呉れる。又原則としてゾンメルシーを使用する。

この春のコースとしては

(1)双雲別、松山温泉よりスタクを越へてヌタプヤムペ

ッに沿ふて下り石狩澤より石狩岳へ。

これは前掲の夏の登路と全然變りなきもので只スキー使用のためヌタブヤムペッの下りは夏に比して半分近い時間で下れるのミ、積雪のために野營地を充分燃料のある所に取らねばかなりの困難と危險を伴ふ事が異るだけで、六月に入つても吹雪に出合ふ事がある。

(2)松山温泉より右手の尾根へ登り化雲岳を經でヌタブヤムペッに到る。

夏だと化雲内を登るが春は水が多くてつめたいので川を溯るわけにはいかない。これと同樣の理由で石狩川を溯るコースは考へられない。それより出來るだけ積雪の上をスキーを利用する方がよいと云ふ事になる。

それで化雲から出て居る尾根を登つて化雲まで行つて圈谷を廻つてヌタブヤムペッに達する。二日目には樂にヌタブペッの中流まで或は本流の出合まで出る事が出來る。

(3)オブタテシケを縱走して

前掲のものと同樣にして達し得る、今年の春私の仲間が十勝岳から中一晩で化雲に到達した由（尤もその泊つた場所で二日ばかり停滯して居たそうだが）である。

(4)化雲岩より五色ケ原、沼ノ原を經、國境線に沿ふて石狩岳に到る。

前三者共に石狩澤を取る場合であるが、これは前三者の途中から五色ケ原に迂回するものである。

積雪の續いて居る場合ならば化雲から一日で石狩越（石狩川とトムラウシとの分れ嶺をなす國境中で最も低い所）の近邊まで來て、翌日石狩岳へ行く事が出來るだらう。併し石狩越より石狩岳寄りの尾根はかなり痩せて居るから或ひは途中で一晩寢なければならないかも知れない。

(5)ニペソッ山を經るもの

ホロカオトブケの岸に沿ふて登り途中より尾根にとつつくかシーシカリベッの方からウペペサンケの鞍初に出て尾根傳ひにニペソッへ行くか、どつちが好いか見當がつきかねる。ホロカから行くとすれば左から來る澤を越へてウペペサンケへ登るか、其の次の左から來る澤を越して尾根傳ひに一二二一の獨立標高を經て行くか、ホロカの二股で四七九の獨立標高の所から尾根を廻つて一八七六の頂（小ニペソッとでも呼ぶべきか）へ行くか、或ひは澤をもつと歩いてニペソッの左肩から出て居る尾根にとつつくか、等種々の登路が考へられるが、要するにその時の融雪狀態即ち澤をどれだけ雪が覆ふて居るか、又岸がつたへるか否やの問

題で決定されるものだと思ふ。ニペソッからは屋根傳ひに石狩岳へ行く。この山は薩張り澤の狀態が知られて居ないためはつきりした事は云へないがユウンナイ温泉邊りから五日か六日目に石狩岳へ達し得るではないかと思ふ、早く誰れかがこのニペソッについてはつきりした事を知らして呉れることを望んで止まない。

冬の登路

冬の登路としては現在私が考へ得るコースは一月から二月の半ば頃までの最も寒い頃に石狩川を溯るコースだけである。これはこの最寒の時期になれば石狩の大箱が凍結するが故である。この大箱の凍結と云ふ事は四年ばかり前に音更から石狩岳へ行く際に帶廣の營林署で凍結せる寫眞と凍結せる箱を通過した方の話とで明かにしたものである。そのものは奥山盆地でかなり前に行つた造材の際に寒中撮つた寫眞だとの事であつた。

それで何故に外の登路はとれないかと云ふ事になるが、外のコースであれば音更川よりするものを除き皆北海道としては最高に近い高所を通過して來るのであつて眞冬北海道の樣な所であの高さの高原を歩き廻る事は如何に危險な無謀に近いものである事を考へれば、又その高さで寢なければならぬ事を考へると到底現在の狀態では（夏の間にでも立派な小屋でも作つて食糧、燃料等を準備でもして置くなら出來るかも知れないが）不可能事に屬する。

又音更川よりするものは元來十勝國側の方は石狩國側に比して降雪が非常に少ないのと、音更の流域は非常な密な森林である事とより川が雪で覆はれなければ歩く事が困難になるし又よし歩けても時日は石狩川をとるものより大分多くかゝるし、又石狩岳への取つきの最後の登攀のかなり困難な事等より最初の眞冬の登山としては石狩川を取るのが至當であると考へる。

以上で大体石狩岳の登路は書き盡した積りであるが甚だ大ざつぱなものでこの雜誌に載せるには恥かしい樣なものだが、初めから會に關係して一度も何も書かなかつたと云ふより書けなかつたので年貢をおさめる積りて書いたので夏の計畫が方々で發表される時、こんなものでも誰れかの參考にでもなればと望み得べからざるを望みてこの誌上を汚す事をお詫びする。

尙詳細に調べられたい方は紀行其の他をあげて置くから

参照せられ度い。尚又違つた點やもつと登路として考へられ實行せらるべきものがあつたら御教示をたまはりたい。

山岳第一、二年第二、三號	小泉　秀雄氏	北海道中央高地の地學的研究	同	大賀　道昞氏 本郷　常幸氏
登高行第三年	大島　亮吉氏	石狩岳より石狩川に沿ふて	山とスキー第三〇號	十勝川を溯つて十勝岳へ
登高行第五年	大島　亮吉氏	北海道の夏の山	同　第三九號	藤江　永次氏
同　第六年	八木橋豐吉氏	北海道中央高地より十勝川を下る	同　第四一號 第四二號	藤江　永次氏

片　言

○私共の雜誌もスキーを中心にしてスポート方面にそして山岳方面に途を開いて進んで來た。そして五年の昔を送つて六年目に完全に第一歩を踏み出した。そして内外共になか〳〵多事になつて來た。賣れ行きがどうのかうといふことは問題ではない。たゞ吾々は此雜誌が眞直ぐに育つて行けば、それで充分である。自分達は何時も身の程相當なことさへ出來れば良いと思つて居る。徒らにもつと大きな規模のものや全國に何万と云ふ會員を有して權威ある何々機關雜誌とか、路傍に羅列してある群小の利益本位の雜誌など、強ひて競走したいとも思はない。小數でも良い熱心なそして本當にスキーのことを考へて下さる人達に僕等の仕事が理解され、愛せられて絶えず伸びて行けば充分であると思ふ。

○今月のニセカウシュッペ山は未だ私共の知る範圍では何處にも紹介されて居らない北海道の山であります。

（君一生）

所謂標高差とレコードの關係

――ディスタンスレース――

岡村源太郎

瑞西國を中心とするアルペンスキー地方面で行はれるディスタンスレースの記錄には、その競走距離何粁とか記してある傍らに括弧して二百米とか三百米とかの數字の記入が添へてあるのに時々氣が付く。此の數字は即ち下降レースの標高差を示すものである。スタートがゴールよりも高い處にあつて、そのスタートとゴールとの標高の差を表はして居るものである。かゝるコースはスタートがゴールより高所にある關係上、下降斜面が登行斜面より多くなり從つて記錄は一般に速くなつて表はれ又ランナーの體力的勞作がずつと輕減せられるのが通例である。そして高度差が大きくなればなる程（困難ならざる地形に於て）その程度が著しくなつて來る。殊に英國式のコースでは殆ど登り斜面が無いと思はれる程の降り專門のレースである。

今年のスウイススキー選手權大會の記錄はスタート（二〇六四米）とゴール（約一三〇〇米）の標高差は約七百六十米以上あつて、從つてその記錄も前號に揭げられたやうに良好なタイムが出て居る。少年組の九粁レースは登りが極めて少く、ベストタイムは二十八分臺であつた事は本誌前號に載つて居た通りである。

此の高度差なるものの記入は、下降レースを行つた場合にはその記錄に常に添へておく必要があると思ふ。例へば十粁レース（高度差三百米）タイム三十分等と表しておくがよい。記錄の良否は必ずしも高度差の大小に比例するものではないが、第三者に對して少からざる參考になるに相違ない。

次にスタートとゴールの同標高にあるコースに於ては、先に述べたやうな高度差は無い。從つて記錄を發表する時も特別の數字を必要とせず、又スタートとゴールの同標高にあるのが現在の國際的コースであるから一般には何等の斷り書きが要らない。

然し我々は現在かゝるスタート即ちゴールであるコースを論ずる場合にも、コースの高度差なるものに注意して居る。その標高差とはスタートとゴールとの高度差にあらずに、コース中の低い地點と高い地點との高度の差を云ふのである。即ちスタート及びゴールが最も低い所(標高百米)にあつて、コース中の最高點が四百米であるとしたならばそのコースの標高差は三百米である。そして此の標高差が大きいコース程降り斜面も多くなるが登り斜面が急峻になるので、次第にそのレース記錄が低下するものと一般に考へられて居る。私も極く粗雜な意味に從つて大体高度差の大になるものはレースの全体のスピードを惡くするものであると考へて居る。

之を裏書する結果は昨年と今年の全日本スキー選手權大會の十粁レースによつて示されて居る。雪質や地形の工合以外に此の高度差の大少が次に示すやうな結果を齎した事が少くないと考へられる。

一九二五年(大鰐)　十粁(標高差約四〇〇百五十米)
　　ベストタイム　一時間二分三四秒(松田君)
一九二六年(豐原)　十粁(標高差約二〇〇百五十米)
　　ベストタイム　五五分四八秒　(矢澤君)
　　五六分四二秒　(松田君)
　　五九分　(今井君)
一九二六年(札幌)　十粁(標高差百三〇十米)
　　ベストタイム　五〇分一九秒　(今井君)
　　雪質不良の時　五五分二九秒　(今井君)
　　(全國中等學校大會當日)

かくの如く短距離レースに於ては、高度差に反比の割合を以て記錄が上下する事を大体に於て認める事が出來る。そして記錄を或程度まで良好ならしむる目的の爲と思はれるが、此の高度差の標準を擧げて居る人がある。西澤勝次氏によれば次の高度差を最大限とし、それ〴〵レースコースの距離によつて異る値を定めて居る。

一周コースの距離	標高差
二〇粁	三〇〇米

二〇粁　四〇〇米
三〇粁　六〇〇米
五〇粁　八〇〇米

即ち之より差の大きなコースは稍困難の程度が多過ぎて不合理と考へらるゝに至るのである。勿論困難なコースでは記錄も振はず、ランナーをして常に落膽せしめ易い。昨年の大會コースは此の點に於て不合格であつた爲、ランナーの技倆は第一回全國大會當時より考へれば實に長足の進歩を遂げて居たにも拘はらず、十粁レースでは僅かに一分一〇秒のレコードの進歩として現はれたに過ぎない。

コースの最高點の最大限は前述の如くであるが、この範圍内の標高差を持つコースでも甚だ困難なコースになつたり、三分の一の比率が破れて登りが多くなる傾向が起り得るものである。且又標高差の大小によつて直ちにコースの難易を論ずるわけにいかない。次に示す記錄では標高差の大小によつて記錄の良否が現はれる事は到底認め得られず寧ろ何か他の登降斜面の傾斜の緩急の程度の如きものによつてスピードが變化する事を考へしむる根據となつて居る即ち同じ年に行はれた有名なる國際的競技に就いての抄錄をして見ると次の如き著しいスピードの差が、優勝者或は同一スキー家の間に現はれて居る。

一九二四年（ホルメンコーレンとシヤモニーの記錄）

ホルメンコーレン五十粁（標高差約三〇〇米）

（一等）ハウク四時間一九分三〇秒
（二等）ヘツゲ四時間二六分五秒
（八等）キエルボトン四時間三七分

シヤモニー五十粁（標高差約八〇〇米）

ベストタイム　ハウク三時間四四分三二秒
（二等）シユトロムシユタツト三時間四六分四三秒
（七等）ライビオ四時間六分五〇秒

一九二六年（ラハイティーとホルメンコーレン）

ホルメンコーレン五十粁（標高差二〇〇米以上？）

（一等）キエルボトン三時間四五分一九秒
（二等）ヘツゲ　三時間四六分一〇秒
（八等）ライビオ　三時間五一分六秒

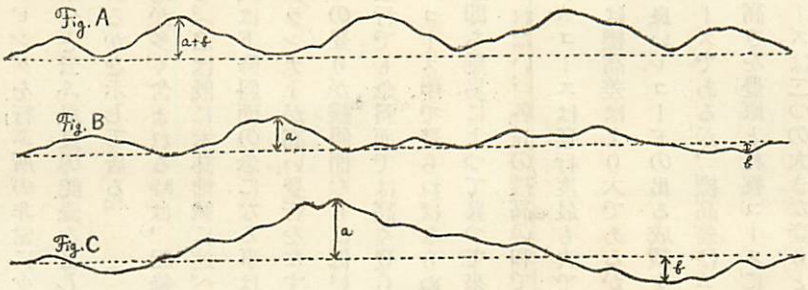
ラハティー五十粁（標高差約一〇〇米）

（一等）ライビオ　四時間一八分一八秒
（二等）ラツバライネン四時間二六分四三秒
（三等）キエルボトン四時間二六分四七秒

此處で最も著しい注目點は標高差百米足らずであるフインランドラテイーの五〇粁記錄が、八〇〇米以上の標高差を有するシヤモニーコースの記錄に甚しく劣つて居る事である。何故にかゝる結果を來して居るかに就いては、フインランドの地形がシヤモニーより困難であつたに相違ない。そしてその困難さは密林内の不便な滑走、甚しい寒氣或はトラックのコンディシヨンにも依るであらうが、更に登降斜面が割に急であつてそのコムビネーシヨンが好くなかつた爲ではなからうか。

之等の理由に就いては實際のコースに對する經驗なき我々は殆ど云云する資格を有せず、又遺憾ながら詳細な記載を見て居ないので此處に述べる事が出來ない。然し先に記した記錄にそのコースの標高差を結合せしめて考へるならばコースの記錄がその標高差に依つてのみ支配せらるゝものではない事が知り得られる。又同樣なる標高差を有すると考へられるホルメンコーレンの記錄も最近に於ては非常な差異を示して居る。即ちコースの難易はその標高差のみでは論ずる事が出來ない。今圖に示す如きコースのプロフイルのシエマを考へて見るに、AとBとはその標高差に於て同樣であるがAコースの登降斜面が急である時は反つてAコースのスピードが劣り勝ちなものである又標高差高きコースでもCコースの如きものを取るならば、恐らくこのコースのスピードは他のAB等のコースのスピードに殆ど劣る事の無い事が圖の上から想像せらるゝのである。

即ち簡單なる地形のみを問題とするならば、登り降り及び平地の三斜面の



A　豊原25粁コースに似たるプロフイル
B　札幌10粁コースに似たるプロフイル
C　1926年ホルメンコーレン50粁コースに似たるプロフイル
（標高差＝a＋b）

コムビネーション或はその緩急の程度が、全コースのスピードに大きな影響を與へるのである。斜面のコムビネーションの一例としては次の如き地形はスピードを增進せしむる要素を多分に有して居るであらう。

一、急な登りの後に困難なる降りを配せずに、容易なる下降斜面をおく時、

二、余り長い急斜面の登行を以て一〇〇米高度に達するよりは、緩斜面登行でその間に時々下降斜面を入れる時、

即ちコースの記錄を良くするには、かゝる注意を拂ふ事によつても可成の効があるわけである。

コースの登降斜面の緩急はコースのスピードを支配する上に大いに影響を與へる。從來の我國の各地の大會でも登降斜面の何れかゞ急であつたコースではそのスピードは皆不良であつた。即ち高田コース（一九二三年選手權大會）は當時十粁下降レースであつたにも拘はらず五十分以上の時間を要し、大鰐コースは一粁平均六分以上のスピードであり四粁の下降レースでも二十分以上を要して居た。之等は下降斜面か或は登行斜面が急であり過ぎた爲に原因する之に引かへて斜面が割合に緩やかであつた樺太コースは比較的良好な記錄を示して居る、又猶地形が容易で開脚登行或はサイドステツピングを行ふ所の非常に少かつた札幌の十粁コースは五十分と云ふ最良の記錄を出し、如何に札幌コースの容易であるかを示して居る。

猶コースは平地が多く含まれる時は、記錄は概して良好になるものである。（之は既に本誌前號に述べた處である）

さて登行斜面或は下降斜面の急になる事は、結局短い距離を滑走する間にランナーが高い登行をなす事になる長い登行をやつてもその登りが緩斜面ならば低い登行をなすのであるが、短い登行でも急斜面では高く登らねばならぬ。

かくして一定のコース中で登らねばならぬ高さなるものは、コースの緩急即ち難易によつて異つて來る。即ち高さは標高差では示されない。各丘の標高の和で示されるやうになる。圖に示すAコースは登行度最も大で、最も困難なコースである。Cは標高差はより大であるが登行度は反つて少くて、割合に良いレコードの出る成績を有して居る。Bは最も容易なコースであるが、標高差はAと同じである

今此の登るべき高さを豊原と札幌コースに就いて比較して見るに、札幌コースは二つの大きな登りと、數多の小登行があつて、その登らねばならぬ高さは精々三百米である

即ち標高差は百三十米であるが登るべき高さの總計は三百米である。之に反し豊原十粁は二つの大きな登りの和は、その高さ（地圖を信用して云ふ時は）は三百米であるが實際は（選手の手に渡つた地圖は我々の練習或は大會の記錄より推して甚だ不正確なる事を知つた）參謀本部の地圖を信用して計算した値より割出せば約四百五十米の甚だ高い登行をなして居る。

即ち此の登行高度の差百五十米が、主として札幌と豊原コースの難易の差を與へる根據になつて居り、且つ札幌のレコードを良好ならしめたものと思ふ。（札幌コースはこの他に猶平地が少し多い）この四百五十米と三百米の差百五十米は標高差ではない、登行高度の總和の差である。即ちコースの難易を論ずるに當り標高差がその難易の標準になるよりは雖ろ登高度の差が稍々正確な指標になる。

猶此の登高度を標準にして樺太豊原の十粁コースと二十五粁コースを比較して見ると、その難易の程度の割合が略ほ了解せられるやうになつて居る。豊原コースの信用し得る地圖が無い爲に割に正確な比較は出來ないが、若しあの十粁コースが二十五粁コース位の割合で登行差を有して居たならば、札幌コースの五〇分のタイムは出來ないにしても、五二分乃至五四分位のレコードは確かに現はれた事と信じて居る。

猶此の登高度は下降レースの場合にも適用し得る要素である。高田の下降十粁レースが五十分内外の記錄を示したに過ぎないのは、この登高度が下降レースとしては割合に大きかつた爲である。アルペン附近の南歐スキー地で行はれる下降レースに余り香しからぬ記錄が少くないのもこの登高度が可成關係して居る事と想像する。

本誌前號にあつたスウイスキー大會の少年組九粁の二十八分臺の記錄に比して、年長組の十八粁レースが一時間十二分臺の悪い記錄であつたのは、前者は登高が殆ど無いのに反し、年長組のコースは可成大きな登高度を有して居た爲である。

結論。標高差の大である下降レースは滑降斜面が多い爲レースは容易であり且つ記錄が良好になる。

スタート及びゴールの同標高にあるコースに於ける所謂標高差は、大体に於てそのコースの難易を示す。然し之は長距離コースになるに從つてその標準としての價値は少くなり、之に代つて登高度即ち一コース中に登高すべき高さ

の總和が猶重要なるコースの難易の標準となる。

そして又登高度は下降レースの時にもそのコースの難易の標準となる事がある。

以上はコースのスピードを支配する種々の要素中、高度に關係あるコースの性質の一端に就いて述べて見たのであります。誤謬のある際は喜んで大方の叱正を受けたいと思ひます。猶之等に就いては猶深く互に研究を進めて、なるべく良好な記錄の生れるコース、走り易いコースを選擇する爲の助けとし、又各地のコースの記錄の比較をなすに就いて、賴りと爲し得る標準を幾分なりとも明かにしたいと思ひます。（一九二六、六、二）

―― 片　言 ――

○今月の雜誌には遙々ドイツのルーテル氏からお便りを貰つたので、これを採錄した。學問に國境なしなんて云ふことは古い言葉ではあるが、スポーツも亦此言葉の適用を認る筈である。微力乍ら僕等の仕事は今本當に國際スキー家達に認められて來て居る。

ノールウエーの K. H. Amundsen 氏、スウエーデンの Holmquist. Nordenson 氏、ドイツの Luther. 氏、英國の Lunn 氏、オーストリーの Wertheimer 氏、イタリーの Ravà 氏等、錚々たる人達との通信が出來るだけでも有難いことである。一に在外の木原さんや、松方さんや、今泉さんや、麻生さん達のお蔭である。

國の內の讀者諸兄に對しての仕事でさへなか〳〵忙しいところへ以て來て外國との交渉が近頃盛んになつて來て、全く持て餘さねば良いがと思はれる位である。是も會とそして雜誌を中心にしての趨勢と思へば致仕方もないことかと思つて居る。學校でもなくてこんな仕事を全く專門にやつて居るのなら可成り充分に仕事をやつて見る位の氣はあるが、本分を吾等は忘れる譯には行かない。本分を守つてやり得るだけやる。夫れが正直のところ愉快でもあるし、氣持も樂なのである。そして夫れが當然なことであらう。

「スキーテクニツクの研究」欄を設くるに當つて

廣田生

「スキー」といふ此三字との關係する多くの問題の内で特にスキー技術といふものを其一分科と考へて、私共は可成り廣い範圍を有するスキー技術の研究を出來るだけ補つて行き度いといふ考へで、大、小の論述によらず此處に一欄を設けて稿述を廣く蒐むることに致しました。

抑々スキーの創始以來スキーテクニツク即ち所謂スキー技術の研究發達が今日迄如何に多くの愛好者によつて遂げられて來て居るか、そして又是が將來奈邊にまで到りて窮るであらうかは、吾々の淺見を以てして容易に究知することの出來ぬ事柄である。

山岳に、丘陵にそして平地に更に空中に應用せられて、嘗ては平地にのみ使用せられたる技術が丘陵地の技術に應用せられ、地上を離るることなきものと考へられたりしスキー技術が空中に應用せられ、又其發達と共に始め空中に於て行はれたりと考へられし運動が、地上の一つの技術にまで活用せらるると云ふが如く、一々過去に於て作られ、そして現在に於て行はれつゝある數多くのスキーテクニツク夫れを今此處に擧げ來つて是を考究し、更に進むであらう將來の程度を推量することは、到底つたない筆を以てして出來得べきものではなく、又恐らく一生是に沒頭するとも窮め得られぬものであらう。其廣い範圍を持つスキーテク

ニックの理想的研究、是は望み得べくして爲し得ざる事柄である。されば私共は其理想の實現を果す必要は無い。私供はたゞ現在の自分達の立場で考究してその最高と考へらるるもの、最善と信ぜらるる方法を考究してそしてスキーテクニックの理想的傾向にまで漕ぎ進んで行くことを爲すに過ぎぬ。而して夫れが吾々のとるべき當然な態度である。

此意味に於て私共は小さいアルバイトに終るかも知れないが、今自分達の考へて居ること。或は先輩の考究したであらう跡をたづねて、此處にスキーテクニックに關する各方面の研究を蒐めて見たい、そして大いに有意義なものにして見たいと云ふ考へから特に此處にスキーテクニックの項を附して見た次第である。

此欄は全く公開論壇にしたいと思つて居ります。そして山岳に於けるスキーテクニックの研究、所謂グレンデ（丘陵）で應用せらるるスキーテクニックに關する事柄、又はスポート的見解からのスキーテクニックの研究、乃至は行樂的立場より考へらるるスキーテクニックの種類、或は又飜譯等、其スキーテクニックの研究が如何なる種類のものでも兎に角多くの稿述を廣く集めて見たいと思ひます。特に此門戸を開いて、多くの人達の玉稿を以て此欄を生かして行きたいと思つて居ります。そして幾分なりとも幸ひ我が國のスキー界の爲に盡すところがあらば私共は欣快に存ずるものであります。

此欄で考究するテクニックを現在の大体の分類的形式によつて整頓して行けば宜しいのですが、それは却てとらはれ過ぎやせぬかと考へられもしますし、又さうして居ては却て單調になつて興味が薄らぐかと考へられますので、別に形式にとらはれず、編輯の時に集つて居る原稿を載せて行くことに致します。

尙雜誌の体裁が或は變つた樣にお考へになる方があるかも知れませんが、新らしい試みとして此項に屬する分だけを何時も横組にして見ることに致しました。讀みにくいと思召さるる方もあるかも知れませんが、又此横組を贊成さるる方もありますので、兎に角實行して見る積りで居ります。横組にした都合上此項に屬するものは凡べて右の方向に頁をくつて讀んで行くことになります。

外國通信

山とスキーの會御中

山の雪もひときわ少くなりました。今冬の名殘に Arlberg で去る二日 Mai Kennen が行はれました。私も及ばずながら參加しました。其節 Dr. Luther に御目にかゝり談は直に我國の Ski の上に及びました。日本のスキー界を知らぬ私は熱心な雜誌「山とスキー」を御紹介しました。Dr Luther は兄等の承知の Der Winter と「山とスキー」とを交換してくれと云つて居りました。何卒宜敷く。

Ski und Berg Heil! Take Asoh.

（編者、此 Arlberg のスキー大會で麻生君は II Klasse の長距離競走に參加されて第三着でありました。）

此紹介狀と一共に我が國の山岳家やスキーランナアに其名を知られて居る C. J. Lüther 氏から麻生君のスキー大會で奮闘して居る寫眞と休憩して居る寫眞と二葉同封で次の意味の手紙を送つて呉れました。

五月十七日、ミュンヘンより

山とスキー會諸兄

Take Asoh 君の紹介で私は貴兄等の月刊雜誌を知りました。私はドイツスキー團体機關雜誌の編輯者として亦 „Der Winter" の發行者として此日本のスキースポーツの月刊雜誌に非常に興味を持つことを信じます。私は貴兄等の「山とスキー」と Der Winter. とを交換して欲しいと切に願ひます。此賴りと一共に最近の Der Winter を御送り致します。是迄日本のスキー雜誌として私の知つて居るものは六甲スキークラブの「雪のさゝやき」だけであります。

麻生君は Tirol の山で非常に熟練なスキー家になりました。彼は Arlberg の第五回目の五月スキー大會にディスタンスレースとジャムプとの二つに出場してディスタンスレースでは非常に良い成績をあげました。（II Klasse で三着）。

夫れで私は彼を大へん歡迎しそして此賴りと一共に是非紹介狀を書いて頂くことに致しました。

若しも貴兄等がドイツ、オーストリー或はスウイスのスキースポートに關する寫眞又は寄稿等が必要でしたら良い寫眞を雜誌にお送りすることが出來ます。

非常に心をこめて。Ski Heil C. J. Luther

彙報抄錄

新着二書評

例のリリエンフエルデルスキー術の大家マチアス、ツダルスキー氏の著 Das Wandern im Gebirge は、北歐のアルペンの峰々への夏とそして冬の訪れを記したものであります。卷中特に Hochgebirge への Ski Wanderung は價値あるかと思はれます。

Jahrbuch des Wintersports von. E. Peege.

一九二六年度の國際スキー大會の事情を木原さんや今泉さん等のお蔭で余りに手早く、そして正確に知りました勢か此一九二五年度のスキー大會の記錄が主である此著書は少し私共には物足らぬ感がありますが、然しスキーのみでなく各國のトボガンや、スケートや、スレッヂなどの競技の記錄の蒐集されて居る點は、ウインタアスポーツに關係して居る者にとつて好參考書と思はれる。(君)

◇山岳展覽會開催

早大山岳部では來る十月中旬東京に於て山岳會展覽會開催の由です。そして各方面から出品を希望さるる由。尙その準備具体案と云ふのが次の如きものの由である。

一、夏期に於ける各登山口及び登山者の數量的統計（五ヶ年間）
一、各登山案内組合の歴史
一、登山技術の科學的解剖（繪及寫眞による）
一、登山器具の進化發達
一、地域的氣候觀測結果一般
一、山岳地方に於けるスキー地圖と雪崩の研究
一、各登山者參考品記念品蒐集
一、山岳に關する圖書蒐集（日本及外國）
一、植物及動物の研究
一、珍らしい寫眞

◇山とキヤムピング用品陳列會

大阪美津濃運動具店にては來る七月三日より「山とキヤムピング用品陳列會」開催の由。

大正十五年度各學校夏期登山計畫

東京帝國大學々友會スキー山岳部

第一班　奥日光方面
第二班　燕、槍岳方面
第三班　大瀧、蝶、常念、槍方面
第四班　烏帽子、槍縱走
第五班　藥師、槍、穗高縱走
第六班　立山、東澤、黑岳、黑部五郎、槍方面
第七班　笠、抜戸、双六、槍方面
第八班　山高地キャンピング
第九班　白馬、鑓方面
第十班　針木、立山、劍方面
第十一班　甲斐駒、仙丈、白根三山方面
第十二班　惡澤、赤石、聖岳方面
第十三班　朝日岳より大烏池
第十四班　藏王、朝日、月山方面
第十五班　秩父、八ヶ岳方面

早稻田大學山岳部

第一隊　上高地キャンピング
第二隊　雄山澤キャンピング
第三隊　燕岳より槍岳へ
第四隊　燕岳より笠岳へ
第五隊　白馬岳より大黑岳へ
第六隊　爺岳より鹿島鎗へ
第七隊　烏帽子岳より槍岳へ
第八隊　針木越、立山、劍山へ
第九隊　白馬より劍岳へ
第十隊　乘鞍より穗高、槍岳へ
第十一隊　東澤より穗高岳へ
第十二隊　藥師岳より槍へ
第十三隊　槍、穗高縱走
第十四隊　錫杖、笠、槍、穗高へ
第十五隊　穗高生活
第十六隊　赤石山脈縱走
第十七隊　甲斐駒、千丈より白根三山へ
第十八隊　朝日岳縱走
第十九隊　北海道の山へ

第一班　雄阿寒岳方面
第二班　石狩岳方面
第三班　天鹽岳方面

第廿隊　劍岳の研究
第廿一隊　穂高岳の研究

第八高等學校山岳部

第一班　烏帽子より槍へ
第二班　笠、穂高岳縱走
第三班　北鎌尾根、穂高岳縱走
第四班　針木越、立山、劍岳方面
第五班　劍岳生活
第六班　白根三山縱走
第七班　上高地天幕生活
第八班　燕より槍へ
第九班　白馬岳方面
第十班　立山三山、針木越え
第十一班　赤石岳方面
第十二班　日光より尾瀬へ

松本高等學校山岳部

第一班　燕、槍、乘鞍岳
第二班　針木、烏帽子、槍、穂高縱走
第三班　針木、立山、劍、白馬
第四班　針木、立山
第五班　後立山山脈縱走
第六班　笠、双六、高瀨、湯股入り
第七班　針木、藥師、槍、穂高縱走
第八班　木曾山脈縱走
第九班　仙丈、小太郎、アサヨ、駒縱走
第十班　白根三山縱走
第十一班　赤石山脈縱走
第十二班　飯豊山

北海道帝國大學豫科旅行部

第一班　惠庭、樽前岳方面
第二班　夕張岳方面
第三班　大雪山彙
第四班　武利岳方面
第五班　ニペソツ山、ウペヽサンケヌプリ
第六班　千呂露川上流
第七班　羅臼山（知床半島）
第八班　北アルプスA班
第九班　同　B班
第十班　同　C班
第十一班　樺太方面

過日二三新聞紙上で石狩岳、ニセイカウシユツペ山及びオプタケシケ山脈登山に關して、膨大に誤つた記事が報道されたが、今後の北海道登山發達上、かゝる誤れる記事の及ぼす影響を怖れてこゝに正しき日程をしるす。

尚登山紀行は本誌上に發表されることゝ思ふ。(山口生)

石狩岳方面

一行、野中、西川、高橋、梅澤　人夫二名

五月十二日　層雲別温泉泊

十三日　黒岳廿丁目附近泊

十四日　黒岳小舍泊

十五日　黒岳—白雲岳—ヌタペヤンペツ澤出合泊

十六日　滞在

十七日　石狩澤—石狩岳—音更岳—ヌタペヤンペツ澤出合泊

十八日　滞在

十九日　ヌタペヤンペツ澤—白雲岳—黒岳泊

二十日　黒岳小舍—層雲別温泉

オプタケシケ山脈縱走

一行、山口、山縣、原、外人夫一名

五月十六日　十勝吹上温泉泊

十七日　十勝岳—美瑛岳—美瑛富士—同鞍部泊

十八日　滞在

十九日　滞在

二十日　オプタケシケ山—スマヌプリ—トラムラウシ岳肩泊

廿一日　トムラウシ岳—化雲山—松山温泉

ニセイカウシユツペ山より北見峠へ

一行、須藤、野崎、井田、渡邊、外人夫一名

五月十六日　層雲別村菊谷方泊

十七日　ニセイカウシユツペ山の前尾根(一三二〇米)泊

十八日　滞在、(頂上へ登る)

十九日　ニセイカウシユツペ山—上支湧別川二股上流泊

二十日　北見峠驛遞泊

ニセイカウシユツペより大雪山へ

一行、松川、永井、貝沼、坂上

五月十六日　層雲別村菊谷方泊

十七日　ニセイカウツユツペ山の前尾根(一三二〇米)泊

十八日　ニセイカウシユツペ頂上を極め直ちに下山層雲別村菊谷方泊

十九日　層雲別鹽谷温泉泊

二十日　黒岳小舍泊

廿一日　黒岳小舍附近登山

廿二日　旭岳—ユコマンベツ川上流泊

廿三日　美瑛泊

誤植について

雜誌を讀んで居て誤植のある位嫌なものはありません。私共は此點を考へまして、出來るだけ嚴密な校正をして居りますが、それでもなか〳〵思ふ樣に滿足することが出來ません。誤植のあることは其雜誌の恥辱であると思ひます。甚だ不本意ではありますが、私共は今度から氣のつき次第訂正を附したいと思つて居ります。何卒御了承下さい。

		誤	正			誤	正
第五十九號一				同	下から六行目	Wüilleümier	Wüilleümer
一	頁左から三行目	少し上る	のし上る	二一頁	上から四行目	Wüilleürmer	Wüilleümer
五	頁左から五行目	Feb 1916	Feb 1926	同	下から三行目	Schmidd	Schmid
一四頁	右から三行目	山を樂しみ	山を樂しむ	二二頁	上段左から七行目	外になか	外なか
同	右から四行目	つもりてはあるが	つもりてはないが	二三頁	上段右から九行目	あるか	あるが
一五頁	左から二行目	所である	所がある	同	下段左から二行目	殘部謹少	殘部僅少
一八頁	左から七行目	一日には出來	一回には出來	二四頁	上段	畏くも	畏くも
同	左から八行目	オルセン氏	カルセン氏	二四頁	下段二行目	Schmeeberger	Schneeberger
第六十一號		誤	正	同	同 五行目	Forskolorna	Forskolorna
一五頁	下段中央	Sigmond	Sigmund	二五頁	上段五行目	四方展望臺	指峯展望臺
二〇頁	下から九行目	Solmid	Schmid	二七頁	上段九行目	大原さん	木原さん
同	同 六行目	Solmid	Schmid				

壯行

日本最北端を以て有名なる千島列島のアライト島は、又北海道地方隨一の高山があると稱せられてゐる島である。

位置が位置なので、今迄あまり人にも知られずに放置されてあつたが、この度本會々員、伊藤、小森兩氏は六月廿日より約二ケ月の豫定で、この高山の登攀及び動植物の研究に出發せられた。

我々はその成功を祈つてやまない次第である。

H. U. S. V 新着圖書

Das Wandern im Gebirge von Mathias Zdarsky.

Jahrbuch des Wintersports VII. Jahrgang 1926 Von Emil Peege.

以上在伯林木原均氏より御恵送になりました。

寄贈圖書

山嶺 六月號　東京野歩路會

山嶺 七月號　同

編輯後記

僕のやうなものが、編輯の仕事を受ついでやることになつた。少々荷が重すぎる形ではあるが、諸先輩始め、皆様方の御助力により、微力ながら全力を傾けて、「山とスキー」の意義を益々深めたいと思ふ。

本號より特に「スキーテクニックの研究」なる欄を設けた。内容の詳細は廣田君の說明を讀んで頂きたい。

輝かしい夏も、次第に深みへ這入つてゆく。森林、溪流、岩峰山頂への思慕、私達は中世の巡禮僧の樣に强い力を持つて經巡るであらう。この時にあたり北海の峻嶺石狩岳を目指して來られる方々のために、佐々木君にその登路の研究を書いて頂いた。

又、岡村君、及須藤君の玉稿も諸君は一種快い興奮を以て、讀まれることゝ思ふ。

尙、諸君の今夏の收穫を御惠送あらんことを希望する。原稿用紙は御申し越し次第早速御送附する。（山口生）

本誌殘本希望の方へ

本誌十七號より六十一號まで、（但し一號より十八號まで及び三十三號、三十四號絕版）殘本保存してあります。希望の方へよろこんでお讓り致します

競技的スキー術の高點はゲレンデスプリンゲンにありと云つても過言ではないそれは驚異である。吾々は此見解に於て唯一の全く優れたるスキー技を知ることが出來る。

ヒユツテの上や屋根の上を飛躍して十米も遠くに行くことは已にしばしば實驗せられて居る。

同じ樣な飛躍を試みて雪庇の上、又は岩石の上を十米乃至は十二米も飛んで居る。かゝる行動は勿論競技的最高努力を語るものである。而して此はゲレンデ滑走にあつては實際的に、むしろ不必要なことではある。されど吾人は此を「阿呆事」として葬り去りたくはない。（競技的最高努力による凡べての同一の宣告は常に嫉妬ミ憤怒から來る餘分の（皮肉味）氣持を他人のより大なる能事に對して持つものである。されば正にスポーツマンはかゝる宣告を以て非常に眞面目でなければならない。）

彼等はむしろ反對に純緯の樂みから、競技に對して即ち大なる肉体的運動を高唱する。

屋根程も高い雪疵を飛び或は之を試みること、又はジヤムピング斜面で七〇米を飛んで立つこと、それは何人を喜ばすか、彼は感情を持ち合せて居るから斯樣な運動を尙未だ完成することが出來るであらう。その運動を吾々スポルトロイテは考へて欲しい。そしてその活動に對しては吾々は自身是に關係するものであるから更に批判の言葉を致さない。(26. 6. 16)

斜面に着くのである。そしてその傾斜の工合を多くの場合空中飛行の短い時間に於て始めて測り知るのである。

夫れ故に實地には常に着陸の瞬間に事實完全に何時も科面に直角に着陸することは必ずしも爲し得られない。

亦大抵の場合兩スキーがどの位深く雪の中に喰ひ込むであらうか、又その爲吾々が堪へねばならない強いショックを何の位の程度に前方に受けるであらうかといふことを殆んど豫測することも出來ない。

此不安定の瞬間には次のことを伴ふ。即ち吾人は着陸の際に全く不知の斜面の部分又は雪の上に非常に強く喰ひ込む。此時には吾人は之れに耐へねばならないそして体重を稍後方にのせ着陸の瞬間に極端に深い屈身の姿勢をとる。即ち此時一方の足を一足長だけ押し出してそして着陸の際に受けるショックを前方に完全に調消しにするまで此姿勢を長く持續するのである。

着陸の前即ち兩スキーが雪面に觸るゝ前に更に体を一瞬間伸ばす。是によつて体は跳躍を樂に保つことが出來る。グレンデスプリゲンは大抵傾斜面に向つて實地に應用せらる。

即ち雪疵の上、小さな（壁）乃至は傾斜道路を越えて、つまり平な斜面が急斜面に續いて居るところで見るところの所謂角を超える時に應用せられる。

是に反して時に稀に本當に障碍物を飛び超える場合があるが、是が問題であるその場合スキーの先端の垂れ下がる危險を實際考へらるゝから。斯樣な實際の障碍物を最も早く飛び超えることは、溝を超える場合、又は斷ち切つてある道路乃至は雪の吹き積んで居る處を超えるといつた樣な場合である。然し岩石や樹幹や塀垣や又は滑走路に立つて居る人等の樣な堅い障碍物を超える樣な場合は、グレンデスプリゲンの此方法を非常手段として、又は完全な方法として超飛に用ひられねばならぬ。何故こいふに、かゝる堅い障碍物に對してスキーの先端を垂れ下げて置くことは結果として非常に痛ましい折損を招來するから。

吾々はかゝる場合にうんと高く飛躍せねばならぬ爲に、兩杖を障碍物の前について体をその障碍物に對して引き上げてはゞ兩杖を立てた高さに持つて行くことによつて、更に必要な強い踏み切りをすることが出來る。兩杖の助けによつて踏み切る此法は勿論極く僅かの努力で應用することが出來る。

多くの場合ゲレンデスプリングでは突然その障碍が起り來るものであるから、その爲に之に對する策も豫め考へられぬ位であるから、眞實の滑走の時期及びスプリングに對する準備も亦その爲に大方まことに短いものである。

滑走に際しての準備は全く唯一の稍々深き屈身姿勢をとることにある。即ち兩腕を下方に（つまり兩手を兩膝に位置し）兩足を互に揃へるのである。

此姿勢によつて力が入り、それで一氣に踏み切ることになる。そして同時に体は兩脚の部分で一瞬間伸張されたる位置にまで齎らされる。此体の伸張されて居る時期はスプリンゲル自身には意識されぬもので、後になつて寫眞を見て明かに判るに過ぎない。踏み切りの際に眞實考へてやる運動は、兩脚を思ひ切り体に近く引きつくることである。そして其場合兩スキーを心持雪面より遠く離して引き上げるのである。かくすれば雪中に引懸るこいふ危險を避け得らるゝ。特に必要なことは自然的に兩脚を引き上ぐることである。そして若しもスプリンゲルが障害物の上で飛躍したならば、却て容易に垂れ懸ることが出來るであらう。夫れ故に踏み切りの瞬間にスキーの先端を可及的上方に押し上ぐるのである。これは實際に靴の踵でスキーの後端を押しつけて出來ることである（夫れ故スプルング斜面での飛躍とは全く逆である。）

次に空中自身では、吾々は思ひ切り前方にかゝる（これは踏み切りのほんの最後で出來得る）そして殆んど（体は全部ではないが、多少後ろに殘される）斜面に直角に着くことが出來る。それ故吾人は何の位の程度に空中で体を前方に持ち行かねばならぬとか又は全く何れ位後方に殘さねばならぬとかいふ風に嚴密に指導されないであらう。此れはむしろ吾人が斜面で飛躍するか又は平地で飛躍するかによつて、全く關係あるものである。或は又全く反對斜面に對してしばしば出來得るけれども事實甚だ危險である。（斯樣な場合には斜方廻轉を利用した方がましである。）若しも着陸斜面の非常に急な場合には、兩腕を前方に打振つて体を極度に屈け寄せた姿勢をとるやうにする。

ゲレンデスプリンゲンで最も六ケ敷いことは、着陸であつて、是は飛躍斜面での飛躍の時の樣に踏み堅められて堅い、何時も急なそして判つて居つて程良く踏みならされて居る着陸斜面に着くのとは異つて、踏み固められて居らない雪面に着くのであつて、多くの場合吾人はその雪の性質を殆んど知らず多少急な塊りの

伺つて見るに。彼等は次の如く述べて居る。

停止滑走であるスウングや、回轉滑走として全く異れる領域を占むるものは、凡べての種類の障碍を超ゆる丘陵に於ける飛躍である。而して是は實地スキー滑走中で最も困難なる練習を要するもので、而も他の凡べての優れたる丘陵滑走中眞實實際に應用せらるゝものはたゞ此滑走のみである。吾々は此ゲレンデスプリンゲンを全く安定に而も鮮かな姿勢で爲し得るスキーランナアの數の今日尙全く少數なることを明かに確言し得らるゝであらう。

實際には一般に此ゲレンデスプリンゲンは不安であつて、之を爲し得るランナアにも亦、大なる困難なる旅行に於て眞實極く稀に應用せらるゝに過ぎない。

されど若しも一度之を爲し得たならば、それは非常に鮮かであるし、そして又特にスキー滑走を豐かなる練習に導くものである。然し吾々はその危險性を愼重の態度をとる際には、自ら此スプリンゲンの方法を長い間の練習によつて眞實に習得しそして精通して居らぬ時は、是を應用すべきものではない。

斯樣な技術の習得には、全く各スキーランナアは一定の可能性を得て試むべきである。一度非常に愉快を味つたから、そして大いなる不倒の確實性を得られたからと云つて特に波狀を爲す丘陵に於て非常な勢を以てしばしば一つ一つの波狀面を滑走し得たばかりでなく、多少共勢强く空中に投げ出されて、そして大いに確實性を得たと言ふ樣な理由から無暗に應用すべきものでない。

然しかゝるしばしば直面する狀態にあつては、熟練して居るゲレンデ滑走者も亦空中にあつて、大方不安定な姿勢になるものである。

けれども滑走者が此ゲレンデスプリンゲンに熟練するならば、彼等は空中にある瞬間に於ては最早自らを落着かしむるは勿論凡べての凹めるゲレンデを比較的素早く而も確實に滑走して行ける程遠方に到達する。

凡べてのゲレンデスプリンゲンは修理されたるスプリング斜面での飛躍とは全くそのプリンシピールに於て異なるもので、斜方廻轉の際の如く何時も兩脚を可及的强く引き上げ、兩杖を意識的に堪へず兩手に保持すべきものである。尙又ゲレンデスプリンゲンは、修理されたるシャンツエに於ける飛躍とは、種々の點に於て異るものではあるが、此處ではそれについての考察を省略したいと考へる。

居る人、ジャムプを特に研究して居る人、又は山岳第一義の特殊の立場の人達にも、凡てスキーランナアと目せらるゝ人達に、凡べて持ち合せられて居るものであらう。此事は、外國のスキーの現在の狀態を見ても容易に推量せらるゝことである。而も近來の所謂ゲレンデスキー滑走は、何れかと云へば消極的動作の樣に考へらるゝリリエンフエルデルスキー術の氣分に、活動的魂氣を吹き込んで積極的な動作を以て行はれて居る。即ち精氣ある競技的氣分に含まれて、そしてその技術が勇敢な動作にまで進んで來て居る。其昔現在のスキー術に固い基礎を築いて來たリリエンフエルデルスキー術を平面的スキー術と考ふるならば、正に研究、實行されつゝある積極的、活動的ゲレンデスキー術は立体的技術と見ることが出來やう。そしてその立体的スキー術として現在最も勇敢なる動作を敢行する點にまで進めて居るものは、所謂ゲレンデスプリンゲンであらう。例の A. Fank として J. Schneider は此ゲレンデスプリンゲンを、スキーテクニツクとしての最高のものであると云つて居る。此拙稿を讀まるゝ方が後に譯述した彼等の言葉を知らるゝならば、彼等の言葉を言ひ換へて、「自ら爲して自ら喜悅するに足るものは此ゲレンデスプリンゲンである」といふ意義を自ら悟らるゝであらう。

今此ゲレンデスプリンゲンに關する Fank と Schneider との記述するところを

スキーテクニツクの研究

ゲレンデスプリンゲン

:Das Gelände Springen:

廣田戸七郎

所謂 "Traekke hop,, と "Geländespringen,, とは、何れも兩膝を前方に屈して上体にその膝頭が屆く位にまで引き上ぐる屈身の動作であつて、前者はノールウエー語で「トレエーケホツプ」と呼び後者は獨逸語發音でゲレンデスプリンゲン又はゲレンデシユプリンゲンと呼んで居る。

此方法に關する定義や、技術の傾向や、應用、利害得失等についての事柄は特に參考資料を蒐めてから他日を期して纏めて見たいと思ふ。

以前平面的動作の多分に含まれて居たスキー術が、現在では全く地上を離れた立体的スキー術に進んで來て居る。そして特にスキーを一つの登山道具として單に利用すると云はるゝ程山岳を第一義として考へて居る人々らしく思はるゝ西洋の山岳家にさへも、冬の山岳とスキーといふものを結びつくるのにスキーテクニツクの利用を持ち來つて居る樣である。尙眼を轉じて所謂高山型の山岳から低山型の山岳是を私は丘陵と考へる。そして定義すると云つては語弊があるが、此丘陵といふ言葉の範圍を一〇〇〇米内外の山々に於て使用して考へる。

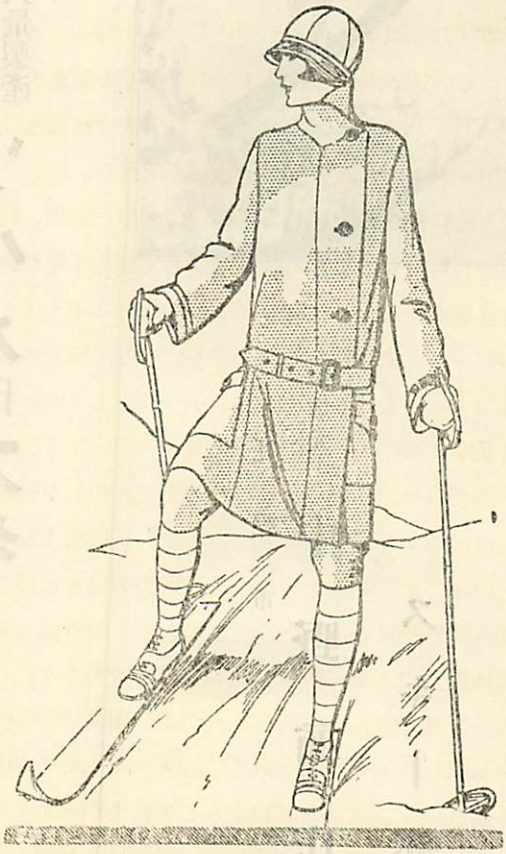
此丘陵に於けるスキー滑走、是が多くの所謂スキーランナア自身に最も興味ある眞味豐富のスキー快味を與へるものであらう。

そして此丘陵に於てのスキー滑走、即ち "Geländeskilaufen" は殆んど凡べての場合複雜なスキー技術を以て、スキーランナアの心を結びつけて居る。即ちランナアは此テクニツクを習得することによつてゲレンデスキーを味つて居る。

此ゲレンデスキー滑走の研究、快味は、所謂一般スキーランナアのみの專有ではなくて、特殊の研究立場にあるスキーランナア、即ち競走を專門的に研究して

スキー並附屬品
製作販賣

••(呈カタログ)••



札幌

小谷運動具店

電話一五六八番
振替七九六四番

優秀なるレコードは
優秀なるスキーに依る!!

斯界第一
大量製産
ツバメ印スキー

全國有名店に有り

製造元
札幌市
中野商店
スキー部

優秀ナルスキート其用具

小樽

梅屋運動具店

第二回畜産工藝博覽會ニ於テ
一等賞金牌受領

登山靴とスキー靴

東京市本郷區四丁目角

太田屋靴店

電話小石川四七一二番
振替東京六一二七番

◆山とスキーの會は北海道帝國大學文武會スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です。

◆スキーを研究せられる人、登山に趣味を持たれる方が一人でも多くお讀み下さることをお願ひいたします。

◆山岳及びスキーに關して何なりとも御寄稿下されんことをお願します又印畫の御惠送を切望致します。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、、。を一字とし、行を更めるときは一字下げること。

◆記事中の數量は全て、C・G・S・系によられん事を望みます。

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

◆本會より發する電信略號を「ヤマ」として居ります。

定價　金參拾錢

＊前金御申込か、現金でなければお渡しいたしません。

＊御送金はなるべく振替にてお願致します。

＊六冊分前金拂込の方には送料を頂きません

＊前金の切れた時には最後の分の包裝にその旨記します。次の御送金あるまで配本を見合せます。

＊本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、緣故の有無にかゝはらず雜誌の代價は頂きます。

大正十五年　六月廿八日　印刷
大正十五年　七月　一日　發行
（毎月一回一日發行）

編輯者　山口健兒
印刷兼發行者　廣田戸七郎
北海道札幌市北一條西二丁目
印刷所　札幌印刷株式會社
北海道札幌市北五條西十一丁目二番地
發行所　山とスキーの會
振替口座小樽八四九五番

La Gazeto
de la
Monta kaj Skia Klubo
No. 62 Julio 1926. Sapporo. Japanujo.

大正十二年七月二十七日第三種郵便物認可
大正十五年六月廿八日印刷納本
大正十五年七月一日發行

山とスキー 第六十二號

定價參拾錢

TOKYO, JAPAN.
MIMATSU & Co., INC.
The Leading Winter & Spring Sports
美滿津の運動具！

合名會社 美滿津運動具店 東京本郷赤門前 電話小石川845-2071番

呈進グロタカ